

第4章 昭和57年度山口大学構内の立会調査

1 教育学部附属養護学校プール新営に伴う立会調査

調査地区 教育学部構内 B-22区 (Fig.39 PL1 - 45)

調査期間 昭和58年2月7日、2月14日

調査方法 工事施工時における立会

調査面積 約880㎡

調査結果 養護学校キャンパス内は昭和54年度に試掘調査が実施されており、キャンパス北西隅から体育館北東方、すなわち、A-22区からB-21区にかけての地域では東西に走る弥生時代から古墳時代の溝2条および平安時代から中世の掘立柱建物跡が検出されている。上記の結果を踏まえ、当初予定されていたA-22区での新営計画は、試掘調査により顕著な遺物、遺構が認められなかった体育館西方に変更されることとなり、立会調査を実施した。現地表面下約60cmまでは表土（腐触土および構内造成時等の置土）でその下部に厚さ約10cmの旧耕土が認められる。続いて厚さ約40～60cmの黒灰色粘土層、30cm以上の厚さをもつ青灰色粘土層（地山）が堆積するが顕著な遺物、遺構は認められなかった。

黒灰色粘土層は中高等部棟以南の地域においても確認されており、調査区以南の地域は少くとも弥生時代以降低混地化しており湿潤な条件下にあったものと推察される。

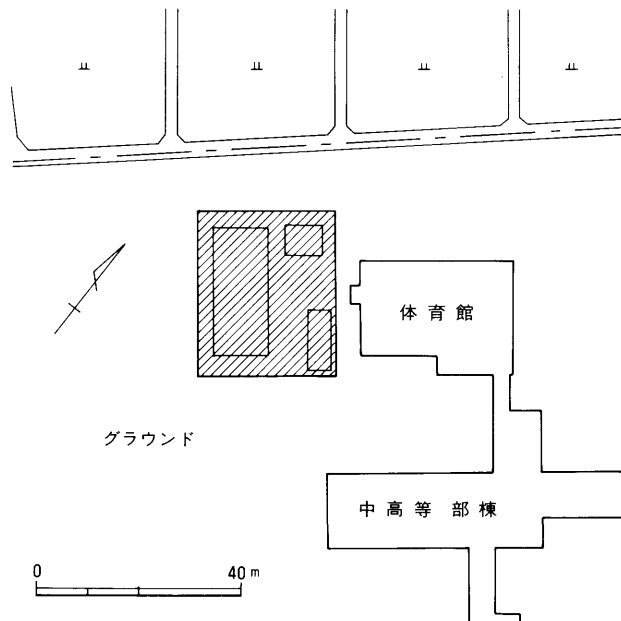


Fig.39 調査区位置図 (1500分の1)

2 理学部放射性同位元素総合実験室排水桝新営に伴う立会調査

調査地区 理学部構内O-18区 (Fig.40 PL 1-46)

調査期間 昭和58年3月12日

調査方法 工事施工時における立会

調査面積 約2㎡

調査結果 環境整備に伴う掘削は現地表下75cmに及ぶが、掘削深度内には構内造成時等の置土が堆積しており、遺物包含層、遺構は未検出であった。

昭和54年度に実施した農学部動物舎新営に伴う発掘調査 (PL 1-25)、および昭和55年度に実施した農学部解剖棟周辺環境整備に伴う立会調査 (PL 1-30) では、厚さそれぞれ60~110cm、60~140cmの表土直下が前者は黄褐色粘質土、後者は青灰色粘土の地山となっており、遺物、遺構は確認されなかった。こうした状況は、調査区周辺地域が東側の農園 (牧草地) から比高差にして約5m低くなっており、東から西に延びる古墳時代の堅穴住居跡や古代から中世の柱穴群の埋存する低丘陵が、北東-南西に貫通する循環道路付近で大規模に削平を受けた結果、埋存の予想される遺物包含層、遺構がすでに消失している可能性を示唆する。

したがって、調査区周辺地域、特に理学部構内をはじめとして農学部、人文学部両構内において、この低丘陵の削平範囲を試掘調査等により確認することによってキャンパス中央部付近における遺物包含層、遺構分布のあり方をより明確に把握する必要がある。

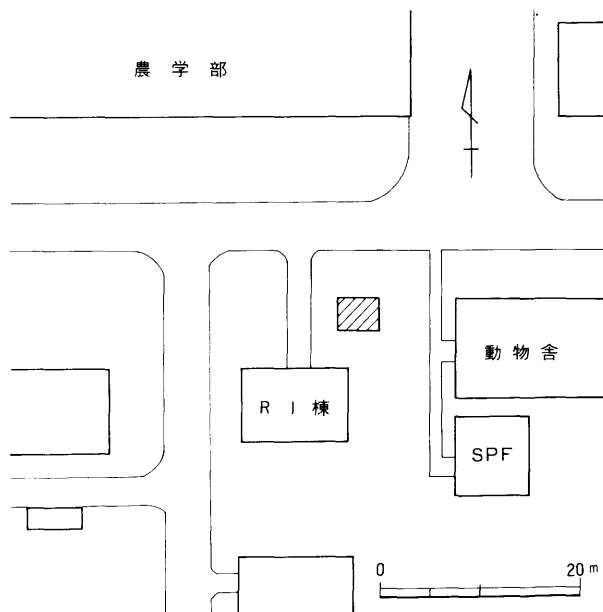


Fig.40 調査区位置図 (750分の1)

3 教養部環境整備に伴う立会調査

調査地区 教養部構内 J・K-16区 K・L-17区 (Fig.41 PL1-47)

調査期間 昭和58年2月21日 3月7日 3月18日

調査方法 工事施工時における立会

調査面積 A区約150㎡ B区約10㎡

調査結果 A区においては植栽に付随する幅約80cm、長さ12~26mの暗渠9ヶ所、B区においては自転車置場昇降口3カ所の掘削に伴い調査を実施した。

工事に伴う掘削はA区では現地表下70cm、B区では現地表下25cmまでであったが、掘削深度内にはいずれも構内造成時等の置土が認められ、遺物包含層、遺構は未検出であった。

教養部構内では昭和56年度擁壁工事に伴う立会調査(PL1-37)の際、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる東西に走る幅130cmの溝が1条検出されている。その埋存相対深度はA区現地表面下約1mにあたり、A・B両区内においても今後、工事等に伴う掘削によって関連遺構が検出される可能性は十分に予想され、遺構の分布範囲の確認が当面の課題となろう。

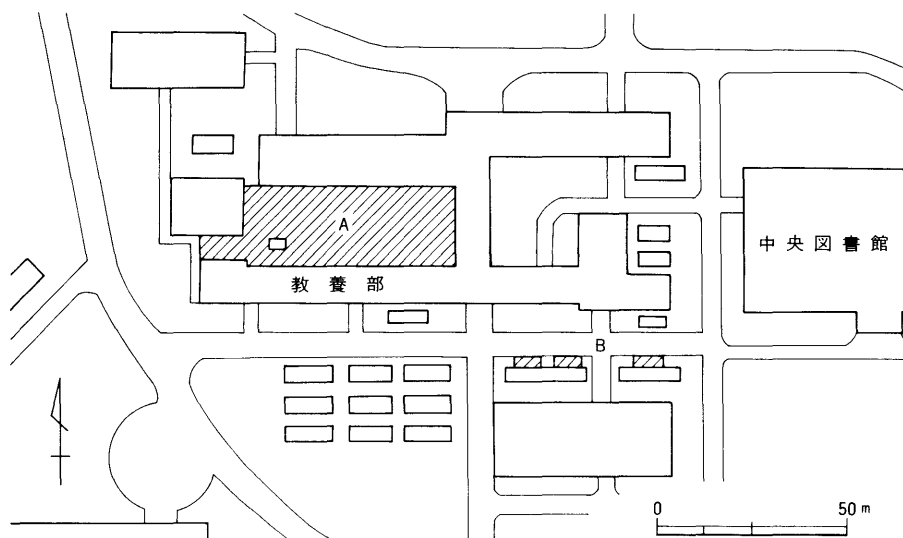


Fig.41 調査区位置図 (2000分の1)